

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02494

研究課題名（和文）アメリカ南部と白人性 第二次大戦後の時代性と人種表象の力学

研究課題名（英文）The American South and Whiteness: Literary Representations of Racial Dynamics in the Post-World War II Period

研究代表者

永尾 悟（Nagao, Satoru）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・准教授

研究者番号：80389519

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地理的・思想的領域としてのアメリカ南部をめぐる、この地域的独自性と表裏一体とされた白人性の概念から、アメリカ南部作家や南部にルーツを持つ作家たちの文学を考察したものである。公民権法制定や冷戦構造によって南部の位置付けが変化した第二次大戦後において、これらの作家たちが、地域内の人種の相互作用を越えて構築される南部白人性を表象しようとした文学的想像力を捉えることを目的とした。カラーラインと地理的境界線の相関性を再考する南部研究の新たな流れを踏まえ、南部のローカリズムとグローバリズムの接点を明らかにし、文学作品における人種表象について白人性の観点からアプローチしたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の理論的枠組みとなる白人性研究は、英語圏においては既存の人文・社会科学を領域横断した複合的学際研究として1990年以降に発展したが、アメリカ文学での研究はまだ発展途上である。本研究は、白人性という視点から南部の地域性や第二次大戦後の時代性を実証的に考察することで、白人性研究のケーススタディとなることを目指した。

本研究で扱う黒人作家たちに共通するのは、第二次大戦後にヨーロッパに移住し、そこでアメリカ南部の人種関係を白人性の立場から捉え直した点である。本研究では、大西洋の対岸から南部白人性を捉えようとした彼らの文学を通して、黒人文学を黒人主体性の問題に一元化しがちな従来の解釈を再考した。

研究成果の概要（英文）：This research is intended to explore how Southern whiteness is represented in novels published in the post-World War II period. Dealing especially with novels by African American writers, it argues that these writers attempted to portray racial dynamics of the South in terms of whiteness and then to deconstruct the dominant regional images created by major white writers.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：白人性（ホワイトネス） リチャード・ライト ジェイムズ・ボールドウィン フランク・ヤービー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「南部は他のいかなるアメリカの地域とも分かち合えない経験をしてきた」という C. Vann Woodward の一節が示す通り、アメリカ南部は、国家や北部から分断された他者の空間として諸言説において表象されてきた。南部白人作家たちは、南部性を白人性と表裏一体にして地域的独自性を描き出し、南部文学研究も伝統的に白人作家を主たる対象としてきた。白人性を自明の前提とする南部像は、Richard Gray による古典的研究 *Writing the South* (1986) に黒人作家への言及が皆無だったことから明らかである。これに対して南部黒人作家たちは、奴隷制時代からジム・クロウ期の人種主義的抑圧を経て、自由と豊かさを求めて北部へ大移動した黒人の歴史的経験を描くことで、黒人性を排除しながら規定される白人南部の構築性を解体しようとした。南部という土地の記憶に対する彼らの所有権の主張は、*From Slavery to Freedom* (1947) の著者である歴史家 John H. Franklin が、「私が論じたのは黒人史ではなく南部史なのだ」と述べた一節に集約される。このように南部は、地理的境界を越えた人種表象の力学を映し出す思想地図である。

南部を人種と地域性の枠組みを越えて再定義するべく、Houston A. Baker, Jr. と Dana D. Nelson が 2001 年 6 月の *American Literature* 誌で “New Southern Studies” の必要性を提唱して以降、南部をめぐる言説の見直しを趣旨とした研究書がジョージア大学出版からシリーズ化されている。これまで出版された 24 冊は人種を主題にしているものが多いが、南部という地域性 / 文化概念の根幹ともいべき白人性に焦点を当てたものはない。白人性研究の成果が領域横断的に共有される中で、白人性研究の思想的枠組みでとらえるアメリカ南部像を提示することも有意義である。これにより、南部をめぐる諸言説に潜む白人性の構築性が可視化されるだろう。

南部白人性の歴史的起源は、Theodore Allen が指摘するように、17 世紀のバージニア植民地の人種関係にまで遡り、それから大農園制度や南北戦争後の時代変化と呼応しながらその概念や表象が複雑化していった。Grace E. Hale や Leigh A. Duck によると、南部白人性構築における歴史的契機は、人種隔離政策への連邦政府の介入が強まった 1940-50 年代である。William Faulkner が南部白人擁護の発言を繰り返したのはノーベル文学賞を受賞したこの時期であり、国家的認知を得た彼の人種観を厳しく批判したのは、同じくミシシッピ出身の Richard Wright、そして、北部生まれでありながら南部を描いた James Baldwin であった。この時代に南部を描いた作家たちに共通するのは、アメリカ国内外の同時代的文脈において南部の地域性を捉え直した点、そして、南部白人性が地域的に特権化された主体でありながら、その構築性に潜む歴史的・地理的矛盾に意識的だった点である。本研究では、筆者が平成 25~27 年に取り組んだ科研費研究課題「William Faulkner 文学における白人性」の内容を出発点としながら、Richard Wright、James Baldwin、そして白人主人公の歴史ロマンスを描いた Frank Yerby が白人南部を裏書きしつつ黒人性を探求した点を検証することにした。歴史的変遷に伴って複雑化した南部白人性表象について、白人作家と黒人作家の対話が活発になった第二次大戦後から十数年の期間に限定することで、作家と作品と同時代的言説の間に存在する有機的な関係性を示すことを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、地理的・思想的領域としてのアメリカ南部をめぐり、この地域的独自性と表裏一体とされた白人性の概念から、Richard Wright、Frank Yerby などの南部出身の作家たち、および南部にルーツを持つ James Baldwin の文学を考察した。公民権法制定や冷戦構造によって南部の位置付けが変化した第二次大戦後において、これらの作家たちが、地域内の人種的相互作用を越えて構築される南部白人性を表象しようとした文学的想像力を捉えることを目的とした。カラーラインと地理的境界線の相関性を再考する南部研究の新たな流れを踏まえ、南部のローカリズムとグローバリズムの接点を明らかにし、近年注目されている白人性研究の理論的枠組みを援用しながら、領域横断的視点での文学研究に結びつけることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、アメリカ南部の人種の力学を白人性表象を媒介として描き出した作家たちの作品について、次の(1)~(3)の研究内容に取り組んだ。

(1) 南部白人性の観点から読み直す *Another Country*

未刊行の作品タイプ原稿と手紙をもとに、James Baldwin が *Another Country* (1962) の執筆過程において南部白人性をいかに捉え直していったのかを考察した。特に南部白人のリンチを題材にした戯曲 *Blues for Mister Charlie* (1964) を同時進行で執筆していた点との相関関係を探りつつ、ニューヨークとフランスを舞台にしたこの作品における南部と人種概念の越境性を探ることを目指した。*Another Country* の先行研究は、Baldwin の伝記作家 David Leeming の証言内容に依拠しているが、タイプ原稿の改稿記録を解析することで新たな作品解釈の手がかりが見えてくる可能性を探った。

(2) *Black Boy* のテキスト分析、および、黒人作家の「自伝」と Wright の南部白人観

Richard Wright の *Black Boy* (1945) が南部黒人の「自伝」という形式を取りつつ南部白人性を照射する試みであることを明らかにすべく、“Wright Papers” の未刊行の手記や手紙を手が

りにテキスト分析をした。さらに、*Black Boy*執筆後のRichard Wrightが白人主人公の作品*Savage Holiday* (1954)を書いた点が、Zora Neale HurstonやAnn Petryなどによるホワイトライフ小説(白人主人公の小説)への取り組みが盛んだった第二次大戦後の時代性や人種言説といかに共鳴するのを探った。

(3) Frank Yerbyによる白人南部の歴史ロマンスの書き換え

Frank Yerbyが抗議文学的短編“Health Card”(1944)でO. Henry賞を受賞しながら、その直後に南部大農園を舞台にした歴史ロマンス*The Foxes of Harrow*(1946)を執筆した意義を考察した。アイルランド系移民の主人公が土地と奴隷の所有により南部大農園主になるというこの物語が、歴史家Cheryl I. Harrisが定義する「所有」の特権と結びつく白人性の構築性を暴き出す点を明らかにすることを目指した。創作について公的に語らないYerbyだが、ボストン大学図書館にあるFrank Yerby Collectionの書簡、創作ノート、タイプ原稿を精査し、南部史的文脈によるホワイトライフ小説を執筆した背景を探った。

4. 研究成果

前述した(1)~(3)の研究目的に従い、James Baldwin、Richard Wright、Frank Yerbyの小説について以下のような点を論じた。

1948年にアメリカを離れたJames Baldwinが、主にフランスで執筆した*Another Country*において、ニューヨークとパリで生きる南部白人の異性愛者と同性愛者を描いた意義を考察した。「大西洋間の通勤者(transatlantic commuter)」と自称するBaldwinが、南部をアメリカ国内外に「転地(relocate)」しつつ南部白人のセクシュアリティを表象した点が、犠牲者/反抗者としての黒人男性を語る従来の物語からの脱却であることを指摘した。さらにディアスポラ思想に懐疑的だったBaldwinが、作品執筆中にアメリカ南部を初めて訪問し、「白人と黒人の父たちの家」としてこの土地を「ルーツ(routs/routes)」と考えた点について、Paul Gilroyが*Black Atlantic*で定義する黒人作家像とは異なるBaldwinの思想を提示した。

Richard Wrightの「自伝」とされる*Black Boy*が南部生まれの黒人少年Richardが北部へ向かう過程を描くについて、Wrightの、黒人作家が人種の真正性を語る「自伝」という定式を書き換えた点、そして、この書き換えが南部の場所性をめぐるWrightの独創的思想を表す点を明らかにした。黒人作家による南部の語り直しは、黒人性についての「ヴァナキュラーな人種表象」だというHouston Baker Jr.の指摘を起点として、北部へ逃れた黒人主人公が追憶する南部を通して逆照射される南部白人性を考察する。さらに、*Black Boy*出版から2年後にヨーロッパに渡ったWrightが、反人種・反帝国主義的思想の中で南部を捉え直した意義を探った。

Frank Yerbyの第1作目の小説*The Foxes of Harrow*における主人公の白人性に着目し、アメリカ南部大農園制度下の人種関係を描いた作者の意図と批評的視座について考察した。この作品は、黒人作家による白人主人公の小説、いわゆるホワイトライフ小説で、第二次大戦後にこの小説形式が流行するさきがけとなった。人種統合の機運が高まっていたこの時代、アフリカ系アメリカ文学は見直しの段階にあったが、*The Foxes of Harrow*は、人種的他者である白人存在を主体の位置から描くことで表現形式の新たな可能性を示したと言える。Yerbyが執筆前に残したメモには、アイルランド系移民の賭博師Stephen Foxがニューオーリンズの白人クレオール社会で大農園主として成功し、南北戦争を経て南部への帰属意識を強める物語の構想が綴られており、地域的かつ時代的特殊性の中で構築される白人性を捉える試みが明らかになった。

上記のような研究成果を通して見えてきた課題として、とりわけ黒人作家たちが白人性を捉えようとする試みにおいて、彼らの人種的アイデンティティと文学的伝統との関係性をいかに考えるかという点である。黒人作家たちは、自らの人種的アイデンティティを前提にして真正な文学を書くべきだという「代表/表象の責務(the burden of representation)」を抱えており、彼らの文学的想像力や思想上の自由を妨げてきた。アフリカ系アメリカ文学の起源が奴隷体験記であることから、奴隷と人種のルーツを共有する作家が「彼ら自身」についての共通体験の物語を書くことであるという単一性が真正性の条件となってきた。従って、伝統的に白人作家によって構築されてきた南部的想像力に対して、黒人作家が脱構築して新たな意味付けをしようとすることは、アフリカ系アメリカ文学の伝統といかに結びつくのだろうか。さらに、白人/黒人作家たちの人種と南部をめぐる相互交渉は、地域性や時代性という枠組みを超えた知的、文学的潮流を生み出しているため、南部作家以外の作品も考察の対象としながら、アメリカ南部と人種をめぐる文学的想像力の重層性を読み解いていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 永尾悟	4. 巻 13
2. 論文標題 The “ Costume ” performance of Racial Identity: Racializing Southern Whiteness in Frank Yerby ’ s The Foxes of Harrow	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多民族研究	6. 最初と最後の頁 105-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 永尾悟
2. 発表標題 Frank YerbyのThe Foxes of Harrowにおける旧南部の白人性構築
3. 学会等名 多民族研究学会第31回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoru Nagao
2. 発表標題 Southern Whiteness in the Transatlantic Imagination: James Baldwin s Another Country
3. 学会等名 “ A Language to Dwell In ” : James Baldwin, Paris, and International Visions (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 藤野功一 / 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 291
3. 書名 アメリカン・モダニズムと大衆文学ー時代の欲望 / 表象をとらえた作家たち	

1. 著者名 安河内英光・田部井孝次編著	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開文社	5. 総ページ数 356
3. 書名 ホワイトネスとアメリカ文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----